

虹 物 語

志 水 辰 夫

虹物語 にじものがたり

一九九五年 四月三〇日 第一刷発行
一九九五年 六月一二日 第二刷発行

著 者 志水辰夫 しずみ たつ

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一一〇
郵便番号 一〇一五〇

編集部 (〇三) 三三三〇一六二〇〇
販売部 (〇三) 三三三〇一六三九三
制作部 (〇三) 三三三〇一六〇八〇

¥1409-

印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 文勇堂製本工業株式会社

検印廃止

乱丁・落丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写、複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1995 TATSUO SHIMIZU

Printed in Japan ISBN4-08-774133-8 C0093

虹物語

装丁 || スタジオ・ギブ
写真 || M・HASUI

目次

いつか浦島

5

きみにかぐや姫

53

身ぐるみシンデレラ

97

プレーオフ

145

虹物語

177

いつか浦島

外へ食事をしに行つて病院へ戻ってきたところだった。廊下で若い女性とすれちがった。きりつとした顔立ちの聡明そうな女性で、年齢は二十四、五歳、OL風のスーツを着ていたせいか身ごなしがいかにも颯爽としていた。その女性がすれちがうとき、本郷敏明に軽く会釈したのだ。敏明はあわてて頭を下げ、それから信じられないという面持ちで女性のほうを振り返った。彼女にまったく見覚えがなかった。ひよっとすると母の知り合いで、見舞いに来てくれた人だったのかもしれない。しかしあいにく母の部屋は廊下を曲がった先にあり、彼女がどこから現れたか確認できなかった。彼に会釈したことだけはまちがいない。

病室に戻ると妹の和恵が来ていた。敏明の姿を見るなり、指をしつと唇に当てて外へ出るよううながした。母が眠っていた。久しぶりに敏明の顔を見て興奮したのだろう、さっきしゃべりすぎたのだった。

「ようやく眠ったところなのよ」

敏明を追って廊下に出てきた和恵が言った。

「それより、いま誰か来てたかい？」

「節子さんでしょう。叔父さんの印鑑証明を届けてくださったのよ」

それでわかった。叔父の会社の社員だったのだ。叔父の本郷真介は父の実弟で、建設会社を経営している。若いとき遊び人だったせいかわ女子社員の採用にはうるさく、面接には必ず立ち合って美人をそろえているという評判だ。しかし叔父の会社にあんな女性がいたろうか。叔父の好みとはすこしちがうような気もするのだった。

「月曜日までいられるんですって？」和恵が言った。

「うん。ぎりぎりまでいて、夜行バスで帰ろうと思っている。火曜の朝、そのまま出勤すればいいんだ」

帰ってくるときもバスにした。金、月と二日間代休を取り、土日を入れて四日間の帰省だった。

「そう。それだけしてくれたらお母さんも喜ぶわ。それで、今夜はわたしとこへ泊まってくれるんでしょ」

「そうもいかないんだ。一度家まで帰ってこようかと思ってる。いろんな用が溜まっているらしい。せめてこっちにいる間ぐらい、役に立ってやろうと思ってる」病室に携帯電話を持ち込み、朝からあれこれ指示を出している母を見ては、単なる見舞いですますわけにいかなかったのだった。

「車はもう直っているかな」

「さあ、前がちよっとへこんだぐらいだから大丈夫と思うけど。聞いてみましょうか」

「頼むよ。できてるようなら、午後、帰りに寄ると言ってくれ」

「わたしはお母さんが走り回るの、ずっと反対してたのよ。乗るなら、せめてもっと大きな車にしなさいって、前から言っていたのに」

「不幸中の幸いだよ。この際休暇だと思ってしばらくのんびりしてもらおう」

「だからそれ、お兄さんからよく言い聞かせてやってね。本人は来週にも退院する気であるんだから。わたしとしてはもう田舎のものは全部整理して、金沢へ出てきてマンション暮らしでもしてもらいたいの」

母の起こした事故は、車を運転していて道路脇の田んぼへ転落したというものだった。怪我は胸部の打撲と右足の骨折、母の年齢にしたraitしたことはなかったが、運転中に貧血を起こしたのが事故の原因とあれば子どもとしては軽視できなかった。あ、いけないと思ったから急いで車を止めた、と本人は主張しているが、それから先のことはなにも覚えていないのだ。慎重な性格だからあまりスピードは出していなかったようだが、それでも貧血を起こした状況によっては取り返しのつかない事故になっていたかもしれない。心労や過労が重なり、それが貧血につながったことはまちがいがなかった。父が残した事業の継続に追われ、母はこれまでの人生でいちばん多忙な日々を送っていた。

「何時ごろこっちを出るつもり？」

「昼食が始まったら出るよ。ただし叔父さんとこへ顔を出そうと思っている」

「だったらなにも節子さんにむり言って、届けてもらうことなかったわね」

「その、節子さんという人に記憶がないんだ。どういう人だっけ」

「あら。叔父さんの秘書じゃない。島村節子さんよ。お父さんの葬式の時、手伝っていたいた

じゃない」

「まったく覚えてない」

「いやあね。だからお兄さんの目は節穴だって言われるのよ」

いっばしの口をきくと、和恵は病室から母の携帯電話を持ってきて廊下でかけはじめた。市内の洋菓子屋へ嫁いで二年、昨年長男が生まれ、いまでは若奥様風の貫禄が出はじめている。顔立ちのわりに色気の乏しい、色の黒い女の子で、タヌキというニックネームがほんのこの前までびつたりだった。それがいまではじつの兄貴が見てどきっとするくらい女らしくなっている。女というものはたしかに化けるときがあるものだ。

敏明自身はあと三か月で三十二になるところだった。兄弟は三人、和恵のほかには弘子という三つ年上の姉がいる。こちらは音楽家志望で、ウィーンへ留学したところまではよかったものの、志を果たす前に恋愛して結婚してしまい、いまでは向こうで日本からの留学生の受入れ屋みたいなことをやっている。昨年ベルリンへ出張したおり寄り道して赤毛の甥っ子にも会ってきた。それなりにうまくやっているようだったが、彼我の文化に落差がありすぎ、最後まで戸惑いじみた感想を捨てることができなかった。

一足早く病室に戻ると母はまだ眠っていた。この一年で身体がひと回り小さくなったように感じられる。五十九という若さで、気品のある顔立ちには十分美しいし、髪だって染める必要もないほど黒いのだが、それでも現在を蝕んでいる疲れや衰えは確実に勢いを広げていた。そのはずというのか、本郷家にとっては激変の一年間だった。来月、父の一周忌がくる。

昼、病院の食事がはじまるのを待って和恵に母の世話を頼み、敏明は病院を出た。叔父の会社

つまり本郷建設は、地元では最大手の建設会社で、香林坊に近い市内の目抜き通りに七階建の自社ビルを構えていた。ちょうど昼どきだったため、社員がぞろぞろと外へ食事に出て行くところだった。

ひそかに当てにしていた先ほどの女性は、やはり食事に出かけたのか、秘書課に見えなかった。残っていた男子社員に取り継いでもらって社長室へ入ると、叔父の真介はクジラの解体だってできそうな大きなデスクの上で、貧弱なざるそばを食っていた。年は取りたくないもので、朝からステーキを食っていた叔父がいまやこのていたらくである。

「おう、悦子さんの見舞いで帰ってきたのか。それはご苦労だったな。悦子さんもさぞ喜んだろう」

父より五つ下だからまだ六十を超したばかりだった。本郷家の異端児だった面影はいまでも鼻の下に蓄えた髭や、ハーディ・エイミスのスーツを羽のように着こなしているところなどに残されており、年寄りという相貌にはほど遠い。結婚が遅かったから孫はなく、長男の正忠が今年やっと大学へ入ったところだった。敏明が建築を志したのも、もとはといえばかつこよくて不良っぽい、この叔父にあこがれたからにほかならない。

「このたびはどうも、母がお世話になりました」

一応の礼儀として堅苦しい挨拶をした。母の入院ばかりか、父の残した事業のことではいちいち叔父の手をわずらわせている。

「そんなことはどうだっていいよ。大事に至らなくてなによりだ。一年の間にふたつも葬式を出したくないからな」

「これから家へ帰るつもりなんですけどね。母の代理で農協へも行つて来ます。印鑑証明をありがとうございました。叔父さんが保証人になってくれるんだそうですね」

「ただの身元保証人だぞ。悦子さんが本郷家の代表であることを証明するという、ごく形式的なものだ」

「なんだ。ぼくはまた借金をこしらえたら、叔父さんが全部尻拭いしてくれるのかと思った」

「よせよ。本郷家の道楽息子はおれひとりでたくさんだ」

「それはずるいんじゃないですか。自分ひとり好きなように遊んでおいて、息子や甥に品行方正を押しつけるなんて」

「なんだ、おまえ、からみに来たのか」そばを喉に詰まらせて叔父は言った。

「冗談です。きょうは折り入って相談したいことがあつて寄つたんですけど」

「年寄りをからかうものじゃない。なんだ、言ってみろ」

「今年いっぱい東京を切り上げ、こつちへ帰つてようかと思つてゐるんです。叔父さんはどう思います」

叔父の真介はぎょろりとした目を向けて、そばつゆをすすった。それから煙草と楊枝の両方をくわえ、しばらく敏明を見つめていた。びっくりはしていなかったし、それほど意外そうでもなかった。

「なぜそう思つたんだ」

「本郷家はおれの代でつぶれてもいいとおやじは言つてました。しかし本心からそう思つていたんじゃないと思つてます。三百年以上つづいた家があり、その家の歴史がその土地と分かちがたく結

びついている以上、誰かがその歴史や伝統は守っていかなければならないんじゃないかと、最近そう思いはじめたんです。祖先を選んで生まれてきたわけじゃない子孫にしてみたら、かなり迷惑な部分もあります。しかし祖先が連綿と伝えてきたものを、いまの時代に合わないからといって、子孫のぼくが勝手に処分していいという根拠もないでしょう。伝えることがひとつの文化なのだし、それを守ることは、なにもそれに当たる人間が自分を犠牲にすることでも、伝統やしきたりに縛りつけられることでもないと思うんです。どうしてこんな考えを持ちはじめたのか、自分でも意外なんです」

「そうか」叔父は楊枝をくわえたまま煙草の煙を天井に向かって吹きだした。「悦子さんには言ったのか」

「まだです。いま言うのと迎合したみたいを受け取られかねませんので、先に叔父さんの意見を聞いてみようと思ったんです」

「殊勝だと誉めてやるよ。ちょっとばかりいたいたしいがな。あんなつまらん家で生まれたばっかりに、三十をすぎるとどういうわけか、長男がいきなり責任だとか、歴史だとか、頭のおかしなつたようなことを言いはじめるんだ。おまえの親父もそうだった」

「ぼくにしてみたらそれほど悲壮なことじゃないですよ。遅かれ早かれそうなっていたんじゃないかと思います。それが予想外に早く来た、という気はしなくてもないんですが。もう四、五年のんびりできるかなと思っていたんです」

「いくつになった」

「間もなく三十二です」

「人生の決断をするにはいい年だ」

「ずるいな。叔父さんは三十七、八まで遊んでたじゃないですか」

「だから、ちょっと遊びすぎた悔いを交えて言ってるんだ」叔父はやや苦しそうに言った。「それで、帰ってきてなにをするつもりだ」

「それはこれから考えます。基本的には父の仕事を受け継ぐことになるでしょうね」

「おまえ、恋人は」

「いるわけではないでしょう」

「情けないやつだな。誰か連れてこい」

「父の時代とは時代がちがいます。東京でもらうことはとうにあきらめています。金沢に誰かいませんか」

「いまだき、あんな田舎に住んでやろうなんていう女がいるもんか」

「冷たいな。地元の金沢にいなかったら、なおさら東京にいるわけじゃないでしょうが」

「しかし東京のほうが、女の数に圧倒的に多いんだ。それだけ選択肢だって広い」

「とつくに試してみましたよ。ぼくはいずれ田舎へ帰って、百姓をしなければならぬ人間だと、ずっと言いつけてきたんです。そうしたら誰も寄りつかなかった」

「ばかだな、おまえ。百姓なんて言うから寄りつかないんじゃないか。能登の大地主で、何千町歩もの山林持ちだとなぜ言わないんだ」

「そんなのいやだ。東京近郊の山林と能登の山林とじゃまったく意味がちがうってことを、東京の人間は理解できませんよ。片一方は不動産で、片一方は利用価値のない未利用地、両者は絶対に同